



第326号  
2014年4月号  
[www.bestopia.jp](http://www.bestopia.jp)

## 花とバレエの春の旅

### (1)大学卒業50年

本年4月1日は大学を卒業して50年になり、その記念に本年の入学式に招待されていました。それなりの寄付もして出席するつもりでしたが、迂闊にも6ヶ月前にヨーロッパ向けの格安航空券を買ってしまい変更ができず、後ろ髪を引かれる思いでマドリッドーートレドーミュンヘンーパリへの20日間の旅に出ました。出席者の喜びの声をリアルタイムで見聞しながら羨ましさや悔しさを隠せませんでした。然し、生来的に過去を見ることを苦手としている性格は、いつも前に向かって進んでおり、興味関心好奇心が今回も私を前進させ、豊かに実る旅となりました。

### (2)ボーイング747と共に

私の海外旅行の始まりは1970年7月、就航して間もないボーイング747に乗り、ホノルルで乗り換えサンフランシスコへの研修旅行でした。29歳の誕生日を祝って頂き、帰国の折には、会社のルールを無視してヨーロッパを経由、スイスのアルプスに魅了されたのが始まりでした。そのボーイング747が3月31日、39年間の運航を終えるとのニュースを聞き、自分の旅もいよいよ終わりに近くなると感慨深く羽田空港でその勇姿を眺め、翌日は、今、話題の尽きないボーイング787に搭乗、ミュンヘン経由マドリッドに向かいました。旅への魅力は恐怖心をも打ち砕いてしまいます。

今回の旅には3つの目的がありました。それぞれの土地を再訪し在りし日のある人々との会話を思い起こして来ました。

### (3)愛甲輝男兄と歩いたトレド・授乳の聖母

20年前に、順調な経営の中にも何か納得できないと悩んでおられた愛甲輝男さんを強引に海外旅行にお誘いしたのがスペインを歩く旅で、私の趣味に合わせ護衛して頂いた旅でした。飛行機の中から経営の話、未来へのビジョンを熱く語られ、その情熱はスペインの旅にピタリの感がありました。

現地に着きますと私のペースを尊重してくださって、普通の観光コースにない所に共に足を運んでくださいました。



その思いで深い一つがトレドにある1枚の絵画、エル・グレコの「授乳の聖母—聖家族」を探捜したことです。

その絵はトレドのタベラ病院にあることだけが手がかりでした。

タベラ病院は既に病院の機能を果たしておらず(16世紀の流行病のために建てられた)私達が訪れた時は無人の大きな建物でした。

誰が管理しているのか? 周りの人に尋ねると、ある老婆だという、彼女が鍵を持っていて、大体10時頃くるが、毎日ではないようだ。今日来るかどうかは、分からない。私は待つことにした。幸い2時間待ってその老婆は現れた。老婆の演技には、待ち

に待った上に焦らしに焦らされた。慌てる私をなだめすかし、「慌てるな、慌てるな」その絵はあるが、見せるかどうかは自分の気分次第だという。

気分を損なってはここまで来た甲斐がない、心して気を静め、老婆に従う。暫くして、ついて来いという。右手に沢山の鍵をジャラジャラと鳴らして歩き出した。大きな建物の幾つもある扉を一つずつおもむろに開けていく。鍵を開ける権威を見せつけるようであった。何枚かの扉が開かれた後に、更にもったいぶった笑顔を見せ、ここからが本道だ。暗いから気をつけなさいという。道は地下室に通じているらしい。最後の鍵を見せてくれる。それを握りしめてゆっくりと解錠する。部屋は更に暗く、散乱がひどい、こんなところに本物の絵があるのか? ますます怪しくなる。

見たことのあるグレコの絵が数枚ある。嘆きのペトロもある。満更嘘でもないかもしれない。疑い惑い、気持ちを抑えて、授乳の聖母を探し目をウロウロさせるも、それらしきものはない。あれは何処にあるのか? 詰問するかの勢いで老婆に迫る。老婆曰く、焦るな。見せてあげる。何処にあるのか? 同じ質問を送り返す。

終始そのやりとりを我慢して見守ってくれていた愛甲さんが、ここでユーモラスに「ジャジャジャン」と間の手をいれてくださったのです。これにはさすがの老婆

も不意をつかれたように、角にあった大きな布を勢いよくはがして、これがあなたが見たいものだろうと地下室に響き渡るような大声をあげ、応えてくれました。このようにして私が出会った「授乳の聖母」。その時、それが本物であるという証拠は有りませんでした。疑えば自分が惨めになるので信じ感動の声をあげました。本当に美しい絵です。

それから7年後、東欧6カ国を旅した折に、ブタペスト国立美術館を30分だけ訪問する機会がありました。その短時間に私は「授乳の聖母」を見たのです。目を疑い、惑いましたが、あの老婆が、きっとハンガリーに売却したのだろうと勝手に思ってその場を足早に去りましたが、スッキリせず、3年前に再確認するためにブタペストに行き、じっとその絵の前に立ち観察しました。ちょっと違うことに気づいて分厚い解説書を買って読み求め読んでみると、グレコは、この主題の絵を2枚描いていることが分かりましたが、あのトレドの絵は本物かどうか？その後どうなっているのか？あの薄暗い地下室に今も眠っているのか？老婆の後は誰が管理しているのか？そんな疑問と美しい街トレドに惹かれ今回の旅となりました。

それは有りました。タベラ病院は「授乳の聖母」の為の美術館となり、その絵はガラスの中にガードされ、写真も禁止、多くのガードマンに守まれて、威風堂々と高い位置から我らを見おろす位置に有りました。パリの「ミロのヴィーナス」と同じ格付けのような感じでした。ともかく、本物であることがわかり、自分の直感力を評価でき「授乳の聖母」の旅は終わりました。

今年はグレコ召天400年で、トレドに世界中のグレコが集まり、100点近く鑑賞できたことは予期せぬ恵みでありました。愛甲輝男さんと歩いた夏の日を思い流れいく雲間からその笑顔が見えたかのような気分になりました。

話はそれますが、同じような追っかけをベルリンの「ネフェルティティ」でもやりました。この美しい胸像も今はガラスの中にあり、周りにはガードマンが複数見張っています。20年前は触ることができる距離にありました。これらの美しさは京都の広隆寺の弥勒菩薩に匹敵します。今のところ私の3大美です。

#### (4)被害無しのスリに遭う

今回のトレドでの出来事です。チェックインの時間前にホテルに着いたため、ときめく胸を抑えられず、そこそこにサイドバッグスタイルで街に出かけました。サイドバッグは最も危険であることは十分に身にしみて知っている筈でした。パリで友人がサイドバックの中のファスナーを開けられ財布を盗まれそうになった時、私が気づいて、大きな声で、日本語で、何をするかと言って二人の少年を追い払ったことがあります。同じことを二人の少女にやられてしまいました。サイドバックの中のファスナーを開けられていました。その時、お腹に何か触った感触が有り

手を当てるとサッと逃げる手に当たったのです。しまった。やられた。中を確認すると財布だけが無い。然し、二人の少女は逃げないのです。彼女達も不満顔なのです。私は大きなジェスチャーでサイドバックの中を確認しドロボーと叫ぼうかと思ったのですが、彼女達の悔しそうな表情を見て声を出すことはしませんでした。財布がないことは事実でしたが、そそくさと出かけてきたので、財布を持ってこなかった、いつもの忘れグセもあり得るかも知れない。それが事実でホテルに戻りジャケットのポケットを確認するとそこに無事に財布があり、やっと本物の安堵を味い、彼女達の不満顔を思い起こし、悔しかつただろうと同情しました。旅にスリはつきもの、すられる方が悪い。スリの技術はある種の芸術、スリルとスリは旅の友、こんなに言えるのも被害が無かったからです。

パリでも白昼に3人組の少女に狙われました。ほんの僅かの隙が狙われます。バス停が右手か左手か確認するために首を左右に振った瞬間、3人の物売り少女に囲われました。新聞を買えと言う少女、手に絡みつく少女、スリする少女と役割分担があるのでしょう。然し私も負けじと手を振り切って大声あげ追い払いましたが、彼ら次のカモに襲いかかって行きました。彼等にとってはいいカモの老人になってしまいました。これも終わりのサインかも知れません。トラブル・イン・トラベルなどの洒落を言う余裕がありません。これから旅をする方への恥を忍んでの一言です。

## (5) ミュンヘンのバレエ祭

昨年ロシア・ラカツラというバレリーナが来日して10分位の舞踏を観ました。かなりの数のバレエを見てきましたが、技術力、演技構成、芸術性等から最も優れて優雅であると判断し、もう一度見たいと思い調べました。スペイン生まれ、夫と共にペアーを組み、バイエルン国立バレエ団に属していること、4月第2週にバレエ祭があるということで早々に予約を取りこの旅を決めました。1週間滞在しましたが彼等は出演せずガッカリしました。現地で知り合った人から、彼女はソチ・オリンピックの開幕でも呼ばれる人気者になり、世界を駆け巡っているということです。ここでも自分の芸術感性は確かなものがあると自信をつけてミュンヘン・バレエを鑑賞してきました。第一夜、マドリッドからの飛行機が大幅に遅れミュンヘンに着いた時には日が暮れており、空港から列車で移動、ホテル最寄の駅で下車、出口も確認して地上に出て200m先のホテルを目指して、重い荷物を引きずって歩き始めましたが一本道を間違えグルグル回っているうちに、「庄屋」という日本料理店の前に出てきました。ここは事前にマークしていた店でしたので、嬉しくなり、方向感覚を取り戻し無事にホテルに到着、荷物をほどく間も無く、バイエルンシュタットバレエに向うも既に開演時間10分過ぎています。後半は見られると鷹をくくってしまいましたら、今日は休憩がありませんと無慈悲な答え、映像室に案内されビデオ鑑

賞の第一夜となりました。翌日も同じ演目なので、予習ができ、難しさの中にも余裕をもって鑑賞できたことが良かったです。

「ラ・バヤデール」は原作を忠実に演出しつつ最後の悲劇を浄化作用を取り入れ心



やすく鑑賞できました。「真夏の夜の夢」はコンテンポラリー化され且つ変化に富んだ振り付けで、世界的に有名なポリーナ・セミオノアが踊りました。ミュンヘンの寛容な観客は大喝采の拍手を送りましたが、全体的に盛り上がりが無いように私には感じられました。これは先入観がしから占めることで、スペインの情熱、カルメン的な要素を備え持つロシア・ラカッラの瞬時に変わる陰陽、明暗のあるメリハリを期待していた主観的な判断です。コンテンポラリー・バレエの解釈は難しく違和感を覚えました。が、芸術家の持つ未来の感性を現していると考えて、デジタル時代の芸術をバレエはこのように表現するのだろうと思いながら鑑賞しました。

オペラではワーグナーで秀でているがバレエでは一步出遅れているドイツが国家を挙げてレベルアップしようとしている強い熱意は感じます。若い人の教育にも非常に熱心で、チャンスを与え、日本人も3名いるようです。心優しいバイエルンのひとびとが彼女達を成長させてくれるでしょう。これからの活躍が楽しみです。その他「フォーエヴァー・ヤング」を鑑賞しましたが、原典の理解がないのでコメントできないのが残念です。何かが暗示されているようで、これから学びます。

バレエの意気込みが挫折して意気消沈していたミュンヘンで元気をもらったのが、若いカップルです。Yさん(女性)がヨーロッパを旅行中に、エアラインが欠航になりホテルの手配等を手伝ったドイツ人Rさんが、彼女を見初め、語り尽くせぬロマ

ンス・プロセスを経て間も無く結婚するという二人に先に触れた「庄屋」を通して知り合いました。Rさんの将来のアントプレナーの夢を聞かせてもらい、ドイツ人らしい綿密な計画と誠実な人柄、優しい性格、二人の幸せな姿を拝見し友好関係を結びました。若い人は本当にグローバルな情報を持っており言語もドイツ語、英語、スペイン語、韓国語を自在に話し、これから北欧の言葉にも挑戦すると言っていました。職業にも国境が無くなっていくでしょう。夢と希望と愛の世界を覗かせていただき気分よくパリへ飛びました。

## (6)パリは、やはり、パリ

パリには毎月通信を発してくれている古賀さんがいますので余裕で到着、彼女の出迎えを受け安堵して過ごすことが出来ました。加齢のせいかわりの空港の広さと複雑さに一人旅の限界を痛感しました。

パリの目的はジベルニーのモネの庭です。毎年4月1日からのオープンということで、冷気の清々しい午前中に到着、空は高く、紺碧は深く、心の底まで快晴になる時期です。日本にはこの澄み切った空がなくなったように私には感じられます。パリ市街は少し前にディーゼルエンジンからの排気ガスでスモッグ警戒がありました。今は回復して青い空にエッフェル塔を眺めることが出来ます。

昨年10月1日に召天した弟が、園芸家の観点も入れて熱心に研究した独創的なモネ研究を偲び、実感を味わいたくての再訪でした。「人は360度綺麗な花に囲まれるべし」という名言を残して意志半ばで旅立ちました。ジベルニーはそれが実感できる場所の一つであることは間違いありません。

4月20日が今年のイースター、銀座教会の青山墓地に納骨することが決まっていたので、時期を合わせて私の思いを乗せたいと考えてきました。

パリは更に古賀さんのご配慮でシャルトル大聖堂の隅々まで案内頂き、4世紀に遡るキリスト教の歴史、ゴシックとロマネスクの建築様式、聖堂内の176窓のステンドグラスの見方を学びました。ステンドグラスの美しさは世界一かも知れません。人は身分の違い、民族の違いを越えて天国観を求めています。ステンドグラスの美しさは天国の美しさを象徴しているように思えます。朝の光、午後の光、夕暮れ時の光、上からの光の恵みの豊かさは限りなく、雨の日のうら悲しいか弱い光も静寂を増して行くのでしょうか。訪問した日は快晴と早い雲の流れで変化に富んだ聖堂内でイースターを前にした聖金曜日、十字架の道行が行われていました。

この夜パリを出発して羽田空港に着いたのが4月19日午後4時、翌日が日本時間の復活祭でした。銀座教会での礼拝、納骨式と素晴らしい旅の締めくくりであり、新たなスタートの日となりました。齢を重ねても日々新たに生きることができると幸せを感謝して今回の旅を終えました。



上 「授乳の聖母」部分

下 バレエ風景





ジベルニーのモネの庭園

